

26	受験番号
中	

国

語

注意事項

- 一、この問題冊子は15ページまであります。
- 二、答えは全て解答用紙に書きなさい。
- 三、この問題冊子は回収しません。持ち帰りなさい。

# 一

小学五年生の「わたし（高梨美桜）」の母「深雪」は、脳出血によつて植物状態となり、現在入院している。

「わたし」は母の病室に毎日通い、親しくなつた看護師の吉田さんとともにそこで時間を過ごしながら、母にいつも語りかけていた。なお、植物状態とは、意識がなく自分の意志で身体を動かせない状態をいう。いわゆる脳死のことではない。

病室を訪れると、母のベッドにはすでにカーテンが引かれていた。中から話し声が聞こえ、カーテンの下から何人の足だけが見えている。

わたしは屈みこんで、カーテンをくぐつた。五人の医学生と思われる若い人たちと吉田さん、遠藤先生、そして、黒髪の脂ぎつた男性教授がベッドを囲んでいた。

学生の一人はカルテを持つて、

「……瞳孔……意識レベルは……」

はきはきと読み上げていく。

「……意識レベルは何点かな」

教授が遮つて質問すると、医学生は黙りこんで、助けを求めるようにちらつと遠藤先生を見やる。

「7点ですね」

先生がぼそりと一言呟くと、教授は頷いて、また医学生は読み上げをはじめる。そういうことを繰り返した後、今度は教授が一人で話はじめた。

「うん。そうだね。この人は脳出血で大脑全部ダメになつちやつたけど、脳幹はまつたくの無傷。つまり、」

教授が母の右手の甲をつねつた。すると母はさつと手を引いて逃れた。

「だから、こういった生理的な\*反射は起こる。他にも、例えば胸骨」

教授は母の胸の前面に拳こぶしをおろし、服の上から強く擦こすつた。ゴリゴリと拳こぶしの骨と胸骨の骨がぶつかり擦こすれる音がした。すると、母は顔をしかめて手を胸元むなもとに近づけ、教授の拳こぶしを振り払はらおうとする。

「痛みに対してこういった反応が返つてくるわけだ」

学生らは一様に興味深げに頷うなずく。

「あと、周りの患者かんじやの手を見てごらん。植物状態では手の筋肉は拘縮こうしゆくする。みんな強く閉じてるだろう。ところがこの患者かんじやは珍めずらしいことに開いたままなんだ」

学生らは母の開かれたままの手を見つめる。

「そして、」

教授がもしやもしやの指毛の生えた人差し指を母の掌てのひらに置いた。すると、母の手は食虫植物が虫を捕まえるみたいにふわっと閉じて、教授の指を優しく包んだ。教授は指を握にぎられ、とても嬉しそうな表情になる。

「把握反射はあくがでてきてるんだ。新生児と同じだね。多分、大脳皮質のある部分だけが壊死してその種の抑制えしがとれたんだろう。それに関しては私が学会に報告した論文があるから、後で読んでおくようだ。さ、君から試ためして」

学生らは順々に母の掌てのひらに指を置いていく。すると、母は全員の指を優しく手で包んでいった。指を握られた学生はみんな幸せそうな顔になつていく。

母が誇ほこらしかつた。すぐに自分の手も包んでほしくなつて、わたしは最後の学生の後ろに並んだ。そして、順番が来ると、母の掌てのひらに拳こぶしを置いた。ふわりと包んでくれた母の手は温かくて、思わずお腹なかがくすぐつたくなる。

「みおちゃん」

\* 反射……意識や意志とは無関係に、一定の刺激に対しても一定の反応を示すこと。

教授の横で介助についていた吉田さんが気づいて、

「あの、こちらの患者の娘さんです」

うやうやしく教授に告げた。わたしは母の手をひっくり返して、手の甲を強くつねつた。母はすばやく手を引いて、わたしは満足げな気持ちでみんなを見上げた。しかし、教授を含めた全員が顔を逸らし、それから、彼らは会釈してすみやかに向かいのベッドに移つていった。遠藤先生だけが目元を緩めて小さく手を振つてでていった。

一人ぼつんと残されて、わたしはふたたび母の手をつねつた。母は手を捻じつて、胸元まで引く。それをしつこく追いかけては強くつねつていった。

「みおちゃん」

吉田さんはカーテンから半身を出して、なんとも言えない表情をしている。

「みおちゃん、つねつちやだめ」

わたしは悪びれもせず、

「なんでえ」

吉田さんを見ながら母の首をつねつた。吉田さんはすっと入つてくると、わたしの手を優しくとつた。

「お母さん、嫌がつてるから」

「ただの反射じやないの？」

「それでもいじめんといてあげて。この前も青アザできたでしょ」

そう言つてから、吉田さんはカーテンから首をだして周りをうかがう。安心した顔で戻つてくると声のボリュームを抑えて、

「どうしてもつねりたいときはここか、ここ」

内出血になりにくい場所を指で数か所ほど指示示す。わたしがそこの皮を強く捻じると、母はイヤイヤするようになって、  
胴体どうたいをくねくねとよじる。

「吉田さんも時々、ここつねつてるん?」

何気なく咳くしゃくくと、吉田さんは目を大きく見開いてから、

「つねつていいのは、みおちゃんだけ」

と瞳ひとみを揺らして首を振った。

「つねつていいのに」

「嫌いやないの?」

「わたし、お母さんとみんなが触れ合ふあってるん、好きやで」

「そうなん」

「でも、大きな声で話す人は嫌。いや\*お母さんうるさい人苦手やから」

吉田さんは相槌あいづちを打ちながら母の手をアルコールで拭いていく。隣となりから教授と\*みいさんの声が行きかうのが聞こえてくると、

「主任さん、ちょっとー」

向かいのカーテンから教授の声がする。

\*お母さんうるさい人苦手やから……入院後、母は大きな声に拒絶反応きよぜつを示したことがある。  
\*みいさん……後に出てくる「あつ君（あつひさ）」の母親。「あつ君」は、「わたし」の母と同じく植物状態で入院してきた少年。

「はいー」

吉田さんは急いで向かいのカーテンの中に入つていく。それを追いかけて、わたしは向かいのカーテンをくぐつた。  
ベッドの向かいには、みいさんが丸々とした胴体で猫脚の青いいすに座りこんだまま、あつ君の利き手である左手を揉み続けていた。

「回診だから廊下へ、って言つてるんだけど。ねえ、遠藤君」

遠藤先生は頷きはするものの、無表情ですぐにそっぽを向いた。教授が困り果てた顔を吉田さんに向け、  
「回診中はどの家族にもでていつてもらつてるんだけどねえ」とぼそりと漏らした。

「あの、もうしわけ、」

吉田さんが口を開くなり、

「あたし、付き添いますからっ」

丸い胴体から甲高い声がでる。すると、疲れ気味の教授や若い学生たちの背骨もカチツと上下に伸びる。

「うちのあつひさ、ときどき腕を大きく振り回すので」

回診の時、父や祖母が悲しそうな息を吐いて廊下へ退場していくのを見ていたわたしは、みいさんのヒステリックな声に一筋縄ではいかない人だと唾を飲んだ。教授も学生らも同じように喉仏を下げて、空気ごと唾を飲みこんだ。

そこから、みいさんは袖をめくつて太ましい両腕をだし、あつ君の手を揉みながら、ぼそぼそとあつ君の状態を話す学生の話を聞いては時おり頷いたりした。そして、順番に触診する段になると、あつ君に触る人をにこやかに見つめていった。

その日の夜、食卓につくなり、わたしはみいさんが回診時に病室に居座つた話をした。すると、父は嬉しそうに

ビールを呷り、祖母は満足げに頷いた。  
あお  
うなず

「あとなあ、カルテ読んでた人があ」

「うん」

「ママの、入院日言つててんけど。わたしの誕生日と同じやつたん」

母との結びつきを感じたわたしは嬉しくて、その偶然を語り続けた。

「西暦から日まで全部一緒にやつて、あれ？って。それって、わたしの誕生日と一緒にやんつ！て、びっくりしてん」

父は途端に不機嫌になり、祖母は悲しそうな顔になる。

「美桜」

父の声色は明らかに怒つているものだった。まずいことを言つたと気がついたものの、何がまずかったかまったくわからない。頭に何も浮かんでこなくて、わたしは母のようにただ呼吸を続けた。

しばらく食卓に沈黙が続いた後に、

「前にも言つたやろ。出産の時にああなつたんや」

父がそれだけ言うと、ビールが入つたグラスをテーブルに置いて、のそのそと寝室に引つこんでいき、そこからでてこなくなつた。

翌朝、起きるなり祖母はわたしをリビングの雑貨棚の前へと引っぱつた。一十二歳の時に職場で父に出会つて、二十四歳で結婚し、その年に妊娠した。そして翌年、わたしを出産した時に脳出血を発症し、大脳のほとんどが壊死した。自分の全てを失い、生きるための機能だけが残り、そこから母は植物状態になつた。

そう話し終わると、祖母は棚の引きだしの一つを開けた。そこには家族の昔の写真が溢れていた。

祖母が朝食のトーストの横に写真の束を置くと、わたしはいつも通り、焦げ目をすこしつけて焼いたトーストを齧

りながら、一枚一枚写真をめくつていった。

父と祖母と一緒に写つてゐる女性は、どの写真でもぱつちりと目を開けて立つていた。

座つてゐる父を後ろから抱きしめたり、安産祈願のお守りを首からかけて、大きく膨らんだお腹を両手で抱えて穏やかな瞳でこちらを見つめていたり、あるいは、前の家のリビングで「美桜」という字を半紙に書いていたり。

それらの写真は今まで隠されてきたものではなかつた。わたしは過去に何度も雑貨棚を開けて、その写真を見たことがあつた。

しかし、そういつた写真を見ても、わたしは父や祖母の若いころを楽しんでいただけで、一緒に写る女性を母として見たことがなかつた。

他にもリビングには三人で写つた結婚式での写真が一枚、祖母の部屋には女性が一人で大きく写つた写真が一枚、後は父の寝室に小さなものが一枚、常に置かれていたが、その女性を母と思ったことがなかつた。

ただ、リビングに飾られているものには少し\*シンパシーがあつた。それは引きで撮られたせいか全員が目を瞑つたように写つていて、なおかつ母は斜めに構えて顔を左に向けていたから、今の母が立つただけに見えたからかもしれない。

写真だけではなかつた。動画も見たことがあつた。動画の中で、女性はウェディングケーキを切つていて、手紙を読んでいたり。よく響く声で笑つてしたり、体を震わせて泣いたりしていた。

また、父や祖母から何度も昔の母の話を聞かされたはずだつた。

母もわたしと同じ小学校に通つていて、今の教頭先生はかつて母の担任だつたこと。

頭の良かつた母は中学から県外の中高一貫の私立学校に通つていて、電車通学をしていたこと。

国道沿いでガソリンスタンドをやつてゐるオーナーが当時大学生だつた母に惚れこんでいたこと。

町役場の就職内定が転がりこんできたが、それを友達に譲つたこと。

蕎麦好きの母は父をよく誘つて病院近くの「山橙香」で鴨南蛮かもなんばんを食べ、必ずその後に隣の駄菓子屋によつたこと。

ことあるごとに母のいろいろな話を聞かされたはずだつた。思い起こせば、出産時に脳出血を起こして植物状態になつたという話も前から何回も聞いていて、暗に諭さとされてきたはずだつた。

しかし、\*寡默な母と過ごしているとそんな話は母のどこにも繋がらないまま流れていつて、気がつけば母は生まれた時からこういつた状態なんだと無意識に思つてしまふのだった。

ステーキを前にフォークとナイフを持つて写る知らない女性。アップで撮られた写真の女性は瞳ひとみをこつちに向けていて、そこにはたしかな意志と感情があつた。写真の女性は普通ふつうに歩いて、普通ふつうに目を開けて話していた。首も捻ねねじれてなくて、顔が正面を向いたり右を向いたり、自由自在だつた。

わたしは朝食を食べ終わると、さつそく着替きがえて支度しだくをした。玄関げんかんをでて自転車に跨またがると、心臓の打ちかたがいつもと違つていた。初対面の人に会いに行く時の打ちかただつた。脚に力が入らず、漕こいでもいつものようになまない。

裏手の駐車場ちゅうしゃじょうにつく頃には息が切れて体が怠くなつていった。自転車を降りてから、家に帰ろうと何度も頭をよぎつたが、それでも裏口から入つて、階段をあがつていつた。

ナースステーションの中では申し送りが行われていた。  
「みおちゃん、おとお……。あら、裸足はだし」

\*シンパシー……共感。  
\*寡默かもく……おしゃべりでないさま。

吉田さんを会釈でかわして、病室へと駆けこんでいった。朝食の時間前で五つのベッドにはカーテンがかけられていた。母のカーテンをのぞくと、ベッドは起こされておらず、母は横向きに寝ていた。

窓の外では葉の隙間から白い朝陽が漏れて、生け垣全体が浮き上がったように光っていた。その重みのない白い光が、窓際の母と枕元の近くでバイブルいすに座る父をほのかに包んでいた。わたしは隣からバイブルいすを押借して、父の隣に座った。

カーテンを閉じると、自分にも淡い光の粒が染みこんでいくように感じた。わたしも父も何も喋らず、眠る母を黙つて見つめる。母の、すーすーという健やかな寝息だけが耳に聞こえてきた。

父は目を細めて、その寝息に耳を澄ますと、嬉しそうに鼻から息を漏らした。

「不思議やなあ」

父は腕組みをして微笑みながら首を捻つた。

「美桜、今はお母さん寝てるよな？」寝てる時の息やんな？」

わたしは母を見つめたまま、黙つて頷いた。

「おれは美桜みたいに、お母さんのこと、なんでもわかるわけじゃないけどな。寝てるかどうかはわかる。寝息だけはかわってない」

父は母の頬を親指で撫でた。父が母を触るのをひさしぶりに見る。

「信じたくないかもしだれんけど、昔はな、お母さん、普通に話しててん」

「うん……」

「あの写真のママは嫌いか」「嫌いとかじやないけど」

「そうか」

「今のママは嫌いなん？」

「嫌いとかじやないけどな。ただなあ、どうしてもなあ」

父はふたたび腕を組んで、首を俯かせる。

「美桜がな、お母さんが生まれつき、こうなんや、つて思つてしまつようにな、お父さんとか、おばあちゃんはどうしても、今のお母さんは深く寝てるだけやつて思つてしまふんや。これが今のお母さんやつて頭ではわかつてゐるねんけどな。こうやつて、寝てるときとかはやつぱり、目え覚ますんちやうかつてな。先生から、二度と元に戻ることはないつて言われてもな、目え覚まして普通に話しあじめるんちやうかつて、初めの五年くらいは毎日思つてた。もう今ではそんなことあんまり思わんくなつたけど。ただな、今でも、寝てるときに会つたらな、気いついたら、昔の深雪が寝てるだけなように見えてくるんや」

たしかに白い朝陽を浴びる母は今にも目が覚めそうに見えた。

「だから」

強い鼻息と共に父は立ち上がる。

「朝と夜は会いに來たくないわ。会つてるときは嬉しいけどな」

父がカーテンからでていくと、後ろ髪引かれるような足音だけが遠ざかっていった。

その足音が聞こえなくなると、わたしは母に近づいて、瞼をめくり、唇をめくり、髪をかきあげておでこをなぞる。

ポケットから写真を一枚だした。下瞼の縁にある薄いほくろ、少し奥に引っこんだ前歯、生え際が斜めになつた狭いおでこ。特徴の全てが写真の女性と一致する。

そんなことは、とうの昔に写真を片手に確認したことだった。その時はそれでも、女性と母が重なることがなかつた。同じ女性だと確認したにもかかわらず、同一人物だとなぜか感じなかつた。その時も頭に浮かんだのは、大きく膨らんだお腹を両手で抱える、目を瞑つて首が捻じれた母だつた。

しかし、今やうつすらと写真の女性と母が繋がりはじめていた。急に母がいろんなものを失つた人間に思えた。胸がぎゅっと苦しくなつて、助けを求めるように母の横によつていつたが、もたれることができなかつた。

今にも母が動画の女性として起きだして、

「はじめまして、美桜ちゃん。高梨深雪つていいます。今日からわたしが母親よ、ママつて呼んでね」  
目をはつきりと開けて、話しだしそうな気がした。少し気の強そうな、しつかりとした目つきで、胸に響いてくるような声色で。母とまつたく同じ顔をした、まつたく知らない女性が。

母の真横に座つたまま、わたしは胸を抱えてうずくまつた。

わたしの母は動かないし、しゃべらない。目も開けないし、笑わない。それがよかつた。

しかし、目の前にいるのは、やはり普通に生きていたあの女性が脳にダメージを負つて、何もできなくなつた人。それが今の母で間違いなさそつた。

そこからしばらくの間、母を訪れると動画の声がどこからか聞こえてきた。朗らかに笑い、時に父や祖母をたしなめるような強い声。

そんな声をだす女性が母に重なると、

“もう、\*甘えたな子”

と目をぱつと開けて、瞼が開いた勢いでわたしはどこかに吹き飛んでしまいそつた。

もたれることができなくなつてから、父や祖母のようにパイプいすに座つて母の少し前か後ろを眺めるようになつ

た。

永遠に目が覚めないだけで体の奥にかつての母が眠っている、と思いこんでいる時の父や祖母のあの、母の少し奥を見つめるような焦点のずれた目つき。

そんな見つめ方を今、自分もしているのがわかつた。  
もし、元に戻つたら。という目つきで眺めていた。

そんな時は必ず、仲良くできるかな、怒つたら怖いかな。あとは、休日どこかに連れて行つてくれるだろうか。そんな考えが自ずと浮かび上がつてくるのだつた。

父と祖母と三人で遊園地に行つた時もそつだつた。疲れてベンチで休憩している父や祖母をおいて、アトラクションの列に一人で並んでいると、ふとあの女性が横に一緒に並んでくれたら、と妄想した。

しかし、数か月も経たないうちに、母はやはりいつもの母に戻つた。

ブラックホールみたいな母の圧倒的な寡黙さに写真や動画の女性は吸いこまれて消えてしまった。写真や動画の母を見てから家をでても、自転車を漕いでいるうちに呼吸のなかにあの女性は消えていって、母に辿りついた時にはもうどこにもいなくなつていた。

そんな時、胸の中に淡い希望や期待の感触だけが残つていて、母に会うとなんだか物足りなく感じた。

それから、ふたたび母にもたれかかるようになると、そんな期待も希望も、すぐに消え失してしまつた。胸に湧きあがってきたものを話せるようになつた。

“みお、産まんかったらよかつた？ 昔みたいに歩いたり、話したり、働いたりしてみたい？”

\* 甘えた……甘えん坊。

と訊ねてみても、母はただ呼吸を続けるだけだった。母の体のどこからも後悔の欠片を感じとれなくて、わたしは心の底から安心して、母に体重を押しつける。

そうすると、いつのまにか母と呼吸のリズムがまつたく同期してしまって、母がこうなってしまった経緯さえもどうでもよくなつて、ただ黙つて一緒に呼吸するだけになる。

ぼんやりとどこでもない一点を見つめて、

“ママの娘やから”

心の奥で囁いた。

“わたしも植物なんかも”

その囁きは声帯を使わずに震えて響いた。

次の呼吸でそんな騒めきも頭の中から消えていって、わたしは西日の残りを腕に受けながら、ただゆっくりと呼吸を続けるのだった。

(朝比奈秋の文章による)

【二月一日入学試験後追記】  
出典 朝比奈秋『植物少女』(朝日新聞出版刊)

問一 「すぐに自分の手も包んでほしくなって、わたしは最後の学生の後ろに並んだ」とあるが、それはなぜですか。

問二 吉田さんは「みおちゃん、つねつちやだめ」と言い、その後では「つねつていいのは、みおちゃんだけ」とも言うが、吉田さんは「つねつちやだめ」と言うのはなぜですか。

- (1) 吉田さんが「つねつちやだめ」と言う吉田さんが「つねつていいのは、みおちゃんだけ」とも言うのはなぜですか。
- (2) 「つねつちやだめ」と言う吉田さんが「つねつていいのは、みおちゃんだけ」とも言うのはなぜですか。

問三 「父は嬉しそうにビールを呷り、祖母は満足げに頷いた」とあるが、なぜですか。

問四 「父と祖母と一緒に写っている女性は、どの写真でもぱっちりと目を開けて立っていた」とあるが、「わたし」がこの「女性」を「母」と呼ばないのはなぜですか。

問五 「朝と夜は会いに来たくないわ」とあるが、父がこのように言つたのはなぜですか。

問六 「もたれることができなくなつてから、父や祖母のようにパイپいすに座つて母の少し前か後ろを眺めるようになつた」とあるが、この時の「わたし」の気持ちの説明として最も適当でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 自分を出産したこといろいろなものを母は失つたのではないかと心苦しく思う気持ち。
- (イ) 動かず喋らない母こそよかつたのに、元に戻ればどうなるだろうかという気持ち。
- (ウ) 父や祖母と同じ思いを共有できるようになつて嬉しい気持ち。
- (エ) 母が目覚めたら、一緒に何かしてくれるかと期待する気持ち。
- (オ) 今まで知つていた母と写真の女性とが繋がり、どのように母を見ていいのかわからない気持ち。

問七 「母に体重を押しつける」とあるが、ここでの母は「わたし」にとつてどのような存在ですか。

## 二

次の各文のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① バイリンで知られる観光地。  
② このアタリに熊がいる。  
③ 議案についてサンピが分かれる。  
④ 夢をハグクむ。

- ⑤ 方針に異議をトナえる。  
⑥ トロウに終わる。  
⑦ ツトメ先へ向かう。  
⑧ 大コウドウは昭和三年に建てられた。

以下余白